

Title	欧米経済史界の趨勢と其の研究法 (下)
Sub Title	
Author	木村, 莊五
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.11 (1920. 11) ,p.1631(129)- 1637(135)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201101-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を上進し、反對にその種類を増加せしむる事なくして單に財の數量を増加するものは其の限界を低下す可し。(P. 47)

四

かくて Patten は財の消費に基づく主觀的價値の理論の構成に入れるが吾人は此の一篇に於ては社會の經濟的進歩に於ける消費の意義を明かにするに止め、それが價値に對する關係並びに經濟學上の客觀的要素分配等の問題に就ては言及せざる可く僅かに次の一論を以て此の稿を終らんとす。

『動的社會に於ては消費の限界的加量の價値の上騰するによつて主觀的價値は上進するの傾向あり。社會の發達に於ける各連續的時代は貨物の總價値をして漸次その總效用に近からしめんとす。たゞ此の法則の意義を充分に評價せんには其の見地が消費者の立場なる事を念頭に置か

ざる可からず。消費者の價値は家屋衣服食糧並びに各種の完成品に關す。其は消費の單位の價値にして消費者が享樂を求め得る補充的貨物の集團の價値なり。費用(cost)は價値を決定すに信ずるに依て古典的經濟學者は當然に其の價値研究を生産者より發せり。然れ共價値を以て消費者の主觀的狀態に依らしむるを以て矛盾なしとする者は消費者より始めざる可からず。(Patten, The Theory of Dynamic Economics, p. 49.)

附記 此の一篇は Simon N. Patten の上記の著者中第七、

第八節の抄譯なり。第七節は The Dynamic Economy. 第八節は The Influence of the Consumption of Wealth on the Value of Commodities である。彼の消費に關する著書には Consumption of Wealth (1889) 經濟學の前提に關しては The Premises of Political Economy 學說に關しては Malthus and Ricardo. The Development of English Thought. (1904) 及び Reconstruction of Economic Theory (1912) 等其他尙數著あり。(九、一〇、一四)

歐米經濟史界の趨勢

と其の研究法 (下)

木村 莊 五

五、諸發達の綜合の必要

更に惟ふに特殊なる研究を繼續しつゝも亦吾人は綜合に對して一層の注意を向け、孤立せる研鑽の若干を綜合し將來の研究を指導するを得べきである。正に吾人のある者は既に經濟史に對し嫌焉たらざるものがある。蓋し斯學が當時の流行を手寫するが如く此の境域彼の境域と轉々し、例へば現在に於ては資本と勞働に傾きて全般の理解に必要な既に認識せられた密接な關係を有する他の重要な部面を閑却せるが如き事之である。私は所詮斯學の最上の興味は次

ぎの二者の平衡を求むるにある事を信ずる、即ち(一)現在の差迫つた問題を歴史の見地から研究する事及び(二)斯學の趣旨を完成するに必要な彼の閑却せられたる方面の研究が之れである。蓋し綜合的研究に對する欲求は常に分析的研究に對する需求と交替する。

吾人はこの振子の振動が第十八世紀の初めから第十九世紀末に至る各時代に起つたのを見る事が出来る、其の最近の振動は舊歴史派經濟學者の燥急な綜合に對する反動としての特殊研究に對するものであつて、この傾向はシュモローの流派の周圍に結晶した。

斯學の現狀に於ての主要なる綜合は一箇の中心主題を以て爲されなければならない。其處で問題は此の主題、他のすべての問題が其の周圍に廻轉する處の主題を發見するにある。此の主題が何であるかに關して殆ど意見の一致がな

い。が然し貨物交換の作用を以て他のすべてのものが其の周圍を眞に廻轉する中心として認め、傾向が増加しつつある。勿論吾人が心に歴史的發展を考へるならば吾々は之を最初は直接の方法により後には交換に依つて爲し遂げた人間の物質的慾望の満足に擴大しなければならぬ。若し此の推論が許さるべきものであるならば、吾人の有する生産のすべての種類に對する基礎的階段は次ぎの如くであらう、(一)生産者若しくは其の親族に依る直接使用の爲めの生産、(二)直接に消費者に販賣する爲めの生産、(三)仲介者を通ずる販賣の爲めの生産が即ち之れである。

勿論吾人は綜合の前に長く且つ熱心に止まらざるを得ない。而して吾人の必要とするものは優れた思想であるかも、或は苦痛な努力の連続であるかもしれぬ。兎に角吾人は此の方向に於

ける人類學者及び社會學者の未だ完璧ではないが、數篇の論説を記憶する、オッペンハイマー (Oppenheimer) の Theorie der Reinen und Politischen Ökonomie (1910) の如き其の一つである。尙ほこの以上に問題たるは經濟史が未だ適當なる内容若しくは充分に廣き範圍を與へられて居ないといふ事であつて、若し吾人が後に分配に對しても同様の重點を附するとしたならば生産のみの考慮に基く綜合は殆ど完全なるものではない。然し若し吾人が吾人の仕事を三部、即ち生産を取扱ふ經濟史と、分配を取扱ふ社會史と、第三に經濟思想の歴史とに分つならば吾人の社會の進歩に就ての理解は最も進んだものであつたらう、がかゝる三重の分岐が維持せられると否とに拘らず、此の三者の中の各自は其の他の者を心に置いて研究されるだらう。これは更に大なる綜合である。

六、經濟史の歴史及び經濟學に對する依屬

經濟史が惱む所の苦痛の最たるものは恐らく其れが常に歴史及び經濟學に、歴史家及び經濟學者に依賴せねばならぬ事である。この依屬の中には正に外部からの刺戟を受ける利益はあるが、又其れはこの利益と相抵する不利益を醸して居る。其の不利益の一つは専門家の缺乏である。而も經濟史は比較的古い科學である。既に述ぶるが如く第十八世紀に於て既に進んでゐたのである。第十八世紀及び第十九世紀の始めに現はれた無數の著作に關する事は今すべてこれを省略するも、吾人は尠くとも千八百五十三年早々イナマ・ステルネック (Inama-Sternegg) によつて此の主題に關する學術的講演が爲された事及び早くも千八百七十八年及び九年に於て同一學者が「經濟史」 Economic History と銘を打つた書物を書いた事を記録し得るのである。英國

の主なる大學の一なる劔橋は千八百七十八年の同様の課程に經濟史を入れた、而も英國に於ては今日と雖も斯學の教授は極めて少い。今エル・エル・プライス (H. P. Price) (經濟史の研究、第五頁) に従へば千九百十八年に於て次ぎの英國の學校に數名の經濟史の専任教授が居た、即ち牛津オリエル大學に一名、マンチェスターに一名、倫敦經濟學校に二名。私はこの以上に殖えた事を知らない。勿論この主題は次ぎの引用句に示された様に英國に於ては廣く教へられて居るが、而も此の主題に對して彼等の全部の注意を傾倒せる専門教授に依るものではないのである。「彼(カンニンガム)の生前に於て彼は自分の主題とした所が、劔橋に於ける私の時代(千八百九十年—九十四年)に於ては歴史科の一項であつた此の主題が經濟科に包括され聯合王國に現存する凡べての大學に於て教へらるゝに至

るのを見た。斯學は此所から勞働者の有識階級に普及し今や廣く第二級の諸學校で教へられて居る。(千九百十九年九月エコノミック、ジャーナル、二九一頁、ノオレス夫人(Mrs. Knowles)は斯學普及の狀を傳ふるものである。

千八百九十二年ハーヴァート大學はアシュレー(Ashley)を亞米利加に於ける經濟史の最初の、又恐らく何れの國に於ても最初の教授と爲した。今日では經濟史の教授は亞米利加の四大學ハーヴァート、コロンビア、イェル、及びミネソタに見出される。爾餘の諸校には斯學の研究に没頭せる數名の教授あるもいづれも歴史若しくは經濟學科に椅子を占むるに止まつてゐる。

斯學に多くの開拓者を出せる獨逸に於てすらも、自分の信ずる處では殆どミニヒの以外に於ては經濟史の講座なく斯學に關する講義亦極

如く書いた。「ガンバー教授自身の研究は概ね其の性質に於て歴史である。彼は合衆國の金融史を計畫した而も彼が其の企圖を嘗て遂行し得なかつたことは自分が常に遺憾に思ふ所である。彼は亦合衆國以外の經濟史上の數箇の問題殊に佛蘭西革命の際のアツシニア紙幣の歴史の如き金融事情及び和蘭の商業及び工業の發達に關し注意を拂つた。尙ほ自分は合衆國の關稅史に關する私自身の著作が其の出來を私がハーヴァート大學を卒業後間もなくガンバー教授によつて自分に與へられた暗示に有する事を附言しなければならぬ。

更に吾人がセリグマン教授の「經濟史上のすべての大進歩は經濟學者に依つて齎らされたもので、歴史家に依つて齎らされたものではない、然らざれば本來經濟學に依つて教養された歴史家によつて齎らされたものである」、(註二)といふ論訣を許すとすれば益々此の感が深い。

歴史派經濟學が不信用になつたが爲めに、若しくは史料に適用された統計的方法が失敗した爲めに、或は經濟史が生産から分配に至る興味の変化と歩調を一にせざりし爲めに、經濟學者が

めて少い。佛蘭西に至つては更に振はない。此の經濟學者及び歴史家に對する依屬は此の主題を二箇の構成部分に分つの結果を生ずる。即ち歴史家は専ら産業革命以前の時代に興味を持ち、近時の經濟學者は産業革命に次いで至る時代に興味を有するが故である、かくして清教徒革命後の英國憲政のその如き、發達の繼續は破壊され、歴史の全運動が害されて居る。

經濟學者は今や經濟史に興味を失ひつゝあると言ふ。若し然りとせば經濟史が經濟學者の努力に對して依屬せる點よりして斯學に對する明白な損失を意味するものである。此の事はロジャース、ジェヴォンス(Jevons)、ダンバー(Darbor)、タウシグ(Tausig) (註二)及びブレンタノの如き經濟學者の高價なる寄與に鑑みる時に特にさう感じられる。

(註二)、千九百十九年七月二十一日、タウシグ教授は次の

經濟史に興味を失ひ若しくは失ひつゝあるのであるか、否かは言明し難い。が兎に角經濟學者は一方研究としての經濟史に興味を失ひつゝあるかもしれないが、勿論他方に於ては主として説明の爲めに經濟史料を使用するの舊慣を去つたものではない。

(註三)、セリグマン教授の此の見解(千九百十九年五月六日附の私信に現れた)と、ソンマラーフ(Sommerfeld)の「歴史家は彼が建てた所の(經濟史の)家屋の主人である」、と云ふ、ブローイエア(Brauer)に依つて Kritische Studien... Wirtschaftsgeschichte(1912, p. 189)に引用された言葉とを對照する時は興味が深い。恐らく此の二つの見解は歴史家が先づ建物を建てたが、歴史派經濟學者が仕上げをした、即ち歴史家が生産を叙し經濟學者が分配を附加したといふ事によつて、融合する様に見える、若し如上の見解にして正しくあるならば第三の時代は經濟史の専門家が斯學を其の特殊なる必要に應じて打建つべき時代である。

個人が生産團體に從屬せる永き經驗を有する經濟史が、近き過去の競争的個人主義的周圍に養成せられたる經濟學の有しない、而して近き

將來の經濟學者にとつて特殊なる或者を供する事は疑なき事である、換言せば、遠き中世の過去の特色である協同と制限の方向に對し漸次に生長しつゝある傾向に伴ひ、經濟學者は益々將來に對する指導として昔時の經驗に歸へるであらうといふことは理由ある事である。此の事たるや最近本能と情緒の分野に於て心理學者の教訓に對して拂ひ、且つ之れに高價なる補遺を行つた所の注意によつて並行せらるべき事勿論である。

蓋し經濟史の依屬性は經濟史百科辭典の缺乏、經濟史術語辭典の缺乏、純粹な經濟史に關する雜誌の缺乏、(今も「社會及び經濟史の季刊雜誌」は確に無い)及び如何にして經濟史が成立せしかを語る歴史の缺乏せる事に依るのである。

千八百七十九年イナマ・ステルネックは言つ

ふ事が悉く其の不利に働いたとしたならば、其の救済策は、此の場合經濟史を獨立専門化する事に在る、但し二つの本來の主題に於ける重點と教養との平衡はこれを放棄しないのである。蓋し歴史家は經濟的分析の新形式に就いての其の理解を缺くの傾きがあり、經濟學者は最近の歴史研究法に就いて殆ど知る處無きが如くであるから。凡そ經濟史の諸問題は更に獨立的な地位を其れ自身に特に主張すべき充分なものがあるのである。今や歴史の經濟的解釋を重んずるものにとつて斯學の研究が興味を喚起しつゝあるのみならず、勞働階級の擡頭に注意せるもの及び過去の經濟的發達の事實、現在の狀態の説明を助け、將來の結果を指摘するを得る諸事實を知らんと欲する人々によつて興味を以て迎へられて居る。諸市及び諸國に於ける勞働者の權利伸長が、經濟史の研究を刺戟せるは恰も中産

た、「終極の目的は領土と國家に關係なく書かれたる人類の經濟史であつた」と。千九百年ブロードニッツ(Broadnitz)は、尙ほ未だ一つの經濟史も書かれてゐない、と誌した。而して最近十年間の終末に方つても此の言葉は尙ほ眞理である。吾人は普遍的性質の經濟史書を一つも持たないのである、一國殊に英國に關する數多の教科書と高等な専門的な精細な無數の研究があるのみである。

既に述べる處にして疑ふべからずとせば、今は經濟現象の更に完全なる分析を伴ひ且つ適當な比較研究に基く發生的見地から書かれた人類の經濟的歴史の時代なのである。恐らく此の瞬間に於て如上の暗示の主要なる價值は他の分存せる諸研究に對し指導的影響を與ふべき事である。

若し經濟史が史學及び經濟學に依屬するとい

階級の勝利が、憲法及び政治史の研究を刺戟せしと同斷である。又商業學校及び中等學校に於ける經濟史の需要は、古き歴史及び現在の經濟學がいづれも完全に直後の未來に就いての一般的必要に答ふるを得ざるがためである。

七、結 論

されば吾人は其の結論に於て、現在の傾向が、一時不振の後に於て、經濟史に更に大なる力點を附しつゝある事、過ぐる數年間に於て勞資二者の反目次第に大を加へたるがため資本及び勞働の歴史に殊に重きを置かれたる事、此の傾向は經濟史の内容の更に一層完全なる分析を反照する他の諸研究に依つて平衡せらるべきものなる事、編年的及び劃期的研究が發生的研究に依つて補助せらるべき事、今日までも優秀なる歴史家及び經濟學者の手裡にある經濟史の指導は今後更に一層有利に其の分野に於ける専門家の利用する處となるべき事等を誌し得るのである。(完)